

二〇二六年度入学試験問題

国

語

(六〇分)

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子は開かないでください。
- 二、この問題冊子は27ページあります。試験中、ページの脱落等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 三、解答用紙(マークシート)の汚れなどに気づいた場合も、同様に知らせてください。
- 四、解答は、すべて解答用紙(マークシート)に記入し、解答用紙(マークシート)の枠外には、なにも書かないでください。
- 五、解答番号は、1～40まであります。
解答用紙(マークシート)には、問題番号が1～50、選択肢が①～⑩まで印刷されていますが、解答にあたっては、各設問に指示された選択肢の数の中から選んで解答してください。
- 六、マークは必ずHBの黒鉛筆を使用し、訂正する場合は、完全に消してからマークしてください。
- 七、監督者の指示に従って、解答用紙(マークシート)に解答する科目・受験番号をマークするとともに、受験番号および氏名を記入してください。
- 八、解答する科目、受験番号、解答が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 九、試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

二月十七日、東京ではことし初めて雪らしい雪がふった。二、三日、めずらしく暖い日がつづき、この日も朝、目を覚ましたときは雨で、春先のような暖かさだった。それがミゾレまじりになり、雪になって、昼近くから逆に冷えこんできた。

わからないものだな――、と私は思った。この日からちようど一と月まえの一月十七日、コンタの死んだことを憶い出したからである。兼好法師は、死というものは正面からやってくるとは限らない、むしろ必ず背後から忍びよってくるものだといっているが、これは人間の場合だけではない、犬の死ぬときだって同じである。

コンタはことし数え十六歳、人間なら米寿にも相当する年恰好だから、お祝いをしてやらなくてはならない。とついこの正月、皆さんに言っただけであった。無論、そんな老犬がこれからさき、そう長く生きられるとは思ってはいなかったが、まさかそれから二週間そこで死ぬとは、夢にも考えられなかったのである。

実際、コンタの体力がこの一、二年、ひどく衰えていることは、何かにつけて明らかだった。朝夕の散歩も、数年前までは三十分から一時間ぐらいつもやらせていたが、この一年ばかりはもう二十分も歩くと、もうへとへとで自分の方から家へ帰りたいがるようになっていた。それに、みちみち小便をするのでも、牡犬らしく後脚の片方をピンと上げるやり方はめったにせず、たいていは四つ肢を地べたにつけたまま、何か不安げな眼な差しで私の顔など見上げながら、やっていた。コンタにしてみれば、そんな恰好で放尿するのは、わびしくてタヨリない想いだつたが、それでも片脚上げて立っているのが大儀でたまらず、自分の小便が両脚の間を流れて行く気分の悪さを我慢していたのであろう。私は、そういうコンタを見るにつけて、哀れさよりも妙に滑稽なおもいがしたものだ。何という情無しの主人だろう。

情無しといえ、あれはコンタの死ぬ一週間ばかり前のことだ。カメラマンのS氏が雑誌のグラビア写真をとりにくるということで、その前日、私はコンタを風呂場で洗ってやった。コンタは、もともと水は怕がらない方だし、とくに私の言うことはよくきくから、いつもおとなしく体を洗わせる。しかし元来は A な日本犬なのだ。無闇に自分の体に触られるだけだって好きではないのに、体中に石鹸を塗りたいくらいで湯をぶっかけられることなんか、まったくありがた迷惑もいところ、イヤで仕方がないのだが、主人のすることだからというのでジツと我慢していたのである。

とくに、その日は寒かった。濡れた体がすぐ乾くように、部屋には暖房をきかせ、ストーヴにも薪をたくさんくべて温かくしておいたが、風呂場には暖房はない。コンタの体に湯をかけてやると、そのときは気持ちよさそうにしているが、すぐに冷えるらしく、体を震

わけはじめた。それでまた湯をかけてやると——こんなことは初めてなのだが——流し場で小便をしはじめた。不潔にはちがいがなかったが、私はコンタを叱る気にはなれなかった。

(ああ、こまった！ 相済みません、こんな粗相をしちまって……)

と言うように、私の顔を申し訳なさそうに見詰めるコンタのオドオドした眼つきを見ると、私は叱るよりも自分の方が辛い気がした。コンタは仔犬の頃、まだ庭の隅の小舎で飼っていたときでも、自分のねぐらのまわりでは排泄はしたことがないくらい、シモの始末はよかったのである。それがいま、風呂場のタイルの上に垂れ流してしまったのだから、コンタ自身がどんなにか情ない想いをしているに違いなかった。

本来なら、こういうことがあれば、コンタの古い先がもはや長くはないことを察知すべきであつたろう。しかし、なぜか私はコンタに死期がくるということが信じられなかった。ずいぶん弱っていることは知っていたが、それでもまだあと一年や二年は生きているものとばかり考えていたのだ。まだ、目は見えていたし、歯もシッカリしていた。そして毛艶も決して悪くはなかったからだ。それに何よりも、げんに自分の傍で生きているものが、ある日、ぽっくり死んでしまうなどということは、到底有り得べからざることにように思われたのだ。まことに、

……死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。人、皆、死する事を知りて、まつこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る……とは、このことであろう。

コンタは、しかし風呂場で湯を使ったその翌日から具合が悪くなったというわけではない。むしろわれわれの眼からは、真白く洗われたコンタは、いつも増して凛々しく見え、食欲もあり、散歩も元気にした。それが一月十四日の夕刻、来客があり、私は一緒に街に出て食事をしたあと、家に帰ってみると煖炉のそばで寝ていたコンタが、何か吐いている。よく見ると、吐瀉物のなかに血が混っているのだ、かかりつけの獣医のOさんに電話で相談すると、すぐ連れてくるようにとのことだった。Oさんは、ふだんから何でもない病気を騒ぎ立て、人をおどかすような獣医ではない。むしろ、のんびりし過ぎるくらい、のんびりかまえている人なのだ。私は即刻、家内の運転する車にコンタを乗せて、Oさんのところへ連れて行つた。コンタは、ふだんから車に乗るのは大好きで、ドアをあけてやりさえすれば、いつでも喜んで飛び乗ってくるのだが、この日は前肢をドアのステップにかけたなり、体を私が支えてやらなければ自分の力では自動車の中にも上れないほど弱っていた。しかし、何ということだろう。それでも私は、これで

B

とは考えられなかったのだ。

翌日、Oさんから電話で連絡があり、コンタは腎臓の機能が悪くなって、このままでは尿毒症(注1)を起こすおそれがあるので、何とか尿

を出させるように努めているとのことであつた。私は初めて不吉な予感を覚えた。風呂場で小便をしたときのコンタのやるせなげな眼つきが憶い浮かんだからである。私が「急性の腎臓炎でも起こしたのでしょいか」と訊くと、〇さんは「いや、急性というわけじゃありません。ずっと前から少しずつ機能が衰えていたのです。まア老衰でしょうね」とこたえた。

老衰か、老衰とあつては仕方がない。普通、紀州犬は十歳ぐらいまでしか生きられないように聞いている。それをコンタは満五年近くも長く生きのびたのだ。このままイケなくなるとしても、以つて瞑すべきだろう。しかし、〇さんは名医である。ことによつたら、という気持は、まだ私のなかでつづいた。翌々、十七日の昼間、私は〇さんの診療所をたずねた。すでに前夜から、点滴をうけているコンタは、相変らず尿が出ず、やはり尿毒症の症状があらわれたのか、こんこんと眠りながら、ときどき小さな声で泣いていた。そして、その晩、私が〇さんに電話で連絡をとり、もう一度、診療所に出向いてみると、たつたいまコンタは息を引きとつたばかりであつた。私は茫然とした。

あれから一と月、私はまだコンタの死んだのが本当のことだと思えない。遺体を庭の片隅に埋め、家内が花と水をそなえてやつているが、私は何となくコンタは〇さんのところへでも預けてあるのだという気がしてならなかつた。それが、きょうの雪のふる庭を見ているうちに、なぜかコンタの死が実感としてやつてきた。雪はボタン雪にちかい大粒のもので、それが絶え間なく音もなしに白くなつた庭の上に降りつもつて行くのを眺めていると、そこに仔犬の頃のコンタが転げまわつて遊んでいる姿が眼にうつり、すると年老いたコンタの死んだことがハッキリとわかつてきた。それは淋しいとか悲しいとかいうものではなく、何とも名づけようのないムナシサであつた。もし私に詩才があれば、そういう心持を詩に託することが出来よう。しかし私には、その才能もない。ただ、先輩の抒情詩人を口真似して、次のようにつぶやいてみるだけだ。

コンタの庭にコンタを眠らせ

コンタの上に雪ふりつもる……

(安岡章太郎「コンタの上に雪ふりつもる」による)

(注) 1 尿毒症……腎臓の機能が低下して起こる病気で、犬の尿毒症は死亡率が高いとされる。

2 先輩の抒情詩人……日本の詩人、三好達治のこと。「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。」の詩で有名。

問一

傍線部 a 「わからないものだな――、と私は思った」とあるが、このときの筆者はどのような心情か。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 1。

- 1 春を予感させるような暖かさから一気に冷え込んで雪がふつたため、急な天候の変化に驚いている。
- 2 コンタの最期が兼好法師の言葉のようにはならなかったことに対して、かすかな皮肉を抱いている。
- 3 高齢ながらも元気であり、まだ長生きしそだったコンタが急死してしまったことを悲しんでいる。
- 4 予想に反するコンタの死期を思い返しつつ、命の終わりに対する不思議さをしみじみと感じている。

問二

傍線部 b・f・g の語句の文章中での意味はどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 2 ↘ 4。

b 「大儀で」

- 1 体力的に辛くて
- 2 体裁が悪くて
- 3 手間がかかって
- 4 大げさに思えて

f 「やるせなげな」

- 1 切なそうな
- 2 無関心な
- 3 投げやりな
- 4 放心したような

g 「以って瞑すべきだろう」

- 1 納得をしてむしろ喜ぶべきだろう
- 2 熟考する時間は十分にあるだろう
- 3 不満なく死ぬことができるだろう
- 4 安静にしておく必要があるだろう

問三

傍線部 c 「情無しといえば、あれはコンタの死ぬ一週間ばかり前のことだ」とあるが、ここで筆者はどのようなことを「情無し」だと言おうとしているのか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 5。

- 1 コンタの衰える様子を見て滑稽さを感じてしまったこと。
- 2 飼い主としてコンタの最期を予期してやれなかったこと。
- 3 内心では水が嫌なコンタの気持ちに気づけなかったこと。
- 4 冬の寒い時期にコンタを入浴させて風邪をひかせたこと。

問四

空欄 A

に入る語句はなにか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 6。

- 1 好戦的
- 2 家庭的
- 3 消極的
- 4 野性的

問五

傍線部 d 「私はコンタを叱る気にはなれなかった」とあるが、それはなぜか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 7。

- 1 コンタのいつもとは異なる行動を前にコンタの死が近づいていることを悟り、粗相をしてしまったことへの怒りよりも哀れみが勝ったから。
- 2 コンタの申し訳なさそうな表情からコンタが深く反省していることが伝わり、厳しくしつけようという思いがすっかり消えてしまったから。
- 3 コンタの粗相を恥じ入るような様子を見て自分のほうが辛い思いになり、すっかり弱り切ってしまったコンタに同情心すら抱いたから。
- 4 コンタの世話とはいえ石鹸を塗ったり湯をかけたたりして嫌な思いをさせ、無理を強いたのが粗相の原因だと思い申し訳なく感じたから。

問六

傍線部 e 「のんびりし過ぎるくらい、のんびりかまえている人なのだ」とあるが、ここから筆者はどのようなことが言いたいのか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 8。

- 1 Oさんは医師であるわりに悠長なところがあるように思われるため、一刻も早くコンタを連れて行ったほうがよいということ。
- 2 のんびりした性格のOさんはむやみに騒いだりはしない人のため、あわてずにすぐコンタを受診させれば大丈夫だということ。
- 3 いつもは落ち着いているOさんがいつになく取り乱していたため、病院で何か困ったことが起こったのではないかとということ。
- 4 おおらかで大げさなことを言わないOさんがすぐに来るように指示したため、コンタは危険な状態なのではないかということ。

問七

空欄

B

に入る語句はなにか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 9。

- 1 コンタが永遠に帰ってなくなるだろう
- 2 コンタが老衰で弱り切っていくのだろう
- 3 コンタの病が回復してもとに戻るだろう
- 4 コンタの病は尿毒症と診断されるだろう

問八

傍線部 h 「私は茫然とした」とあるが、このときの筆者はどのような様子か。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 10。

- 1 わずかな時間差でコンタの最期を看取る^{みと}ことができず、コンタが自分のいないところで息を引き取ったことに納得できずにいる。
- 2 名医のOさんがついていればコンタは一命をとりとめるだろうと思っていたのに、予想外の結果となり言葉が出せずにいる。
- 3 いずれコンタがいなくなるということは覚悟していたものの、あと五年は生きると思っていたため早い別れに戸惑っている。
- 4 心のどこかでコンタは助かるのではないかと思っていた希望も消え、コンタが死んでしまった事実を受け入れられずにいる。

問九

傍線部ⅰ「コンタの庭にコンタを眠らせ／コンタの上に雪ふりつもる……」とあるが、このような詩をつぶやくに至るまでの筆者の心境はどのようなものだったか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 11。

1 筆者はコンタが亡くなってから一と月ばかりその死を直視できずにいたが、庭に積もった雪の抒情的な景色を見たことで感傷的な気分になり、大切な存在を失ってしまったことに対する悲しみに襲われた。

2 筆者はコンタにはもう会えないという現実から逃避していたが、雪がふるのを眺めているうちに生前のコンタについての記憶が呼び覚まされ、コンタの死と向き合いながら生きねばならないと思い直した。

3 筆者はコンタがこの世からいなくなってしまったことを実感できなかったが、雪の中に過去のコンタの面影を見たことでコンタの死を確信し、一言では言い表せないようなやり場のない喪失感に陥った。

4 筆者はコンタが死んでしまったことで自暴自棄になっていたが、雪景色を見る自分の心のうちに庭でコンタと遊んだ時の思い出がよみがえり、コンタの冥福を祈ることがせめてもの弔いになると考えた。

問一〇

本文の出来事を時系列に並べたものはどれか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 12。

1 筆者が兼好法師の言葉を想起した↓コンタが風呂場で粗相をした↓コンタをOさんのところへ連れて行った↓東京でその年初めの雪がふった

2 コンタが風呂場で粗相をした↓コンタをOさんのところへ連れて行った↓東京でその年初めの雪がふった↓筆者が兼好法師の言葉を想起した

3 コンタが風呂場で粗相をした↓筆者が兼好法師の言葉を想起した↓コンタをOさんのところへ連れて行った↓東京でその年初めの雪がふった

4 東京でその年初めの雪がふった↓コンタが風呂場で粗相をした↓コンタをOさんのところへ連れて行った↓筆者が兼好法師の言葉を想起した

次ページ以降にも問題があります。

問題二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

^a五感^aは歴史的産物である。

たとえば、現代では電車の走行音や発車音は騒音だと思われることが多い。では、その音はモダンで科学技術発達の象徴としても捉えられていた。

目や耳、舌など身体の内わゆる感覚器官の働きが、時代によって必ずしも変化するわけではないし、個々人が感じ取る身体的刺激そのものには個人差があるかもしれない。だが、ある時・ある場所に生きる人々の間で共有される感覚体験やそれらに対する認識は、技術や経済、社会的要因によって変化しており、時代性を伴うものである。(中略)

一九八〇年代以降、欧米を中心に「^b感覚史^b」という研究分野が提唱され、感覚は研究対象の一つとして歴史学者や人類学者から注目を集め始めた。五感を歴史的に捉えることは、人々が生きる環境がどのように変化してきたのか、そしてその環境の変化を人々がどのように認識し理解していたのかを考えることである。

つまり感覚の歴史は、存在論および認識論と深く関わる問題である。身体は物理的なモノとして在るだけでなく、文化的なものでもあり、その物理的・文化的構築物としての身体を通して人々は周辺環境を認識するのだ。

^c「景色^c」という語は、「景色を見る^c」のようにはしばしば視覚と結び付けられるが、実際には、その場所を訪れる場合には、見るだけでなく、音や匂い、空気感のようなものを感じ取るし、写真など視覚メディアを通してその景色を見る場合であっても、その場の音や匂いなどが自然と想像されることもあるのではないだろうか。

仏教用語で「^d色^d」とは、広義には五感によって認識される物や現象、それらの総称という意味もある(キョウギには視覚で認知される物を意味する)。ならば「景色」が五感で感じ取るものだとしても納得できるような気がする。五感で感じるものとしての(広義の)景色がいかに作り出され、また変化してきたのか、そしてその景色を人々がいかに感じ、理解していたのかを掘り起こすのが感覚史だといえるかもしれない。(中略)

では、人々の感覚体験・感覚世界はどのように変化してきたのだろう。まず、産業化や工業化、都市化が急速に進んだ一九世紀末から二〇世紀初頭の米国を例に考えてみたい。ヴァルター・ベンヤミンは、交通網の発達や工業化による社会変化を近代化による「ショック」体験だと捉えているが、まさにこの時期は、特に都市部における生活環境・生活様式の変化が人々にとって心身的「ショック」を与えるものだったともいえる。

それは普段の食生活——味覚体験——も例外ではない。一八七〇年代以降、大量生産時代をいち早く迎えた米国では、急速な工業化と市場の拡大に伴い、農業生産者や食品加工業者らは、効率性や標準化に重点を置いた生産の合理化を図ろうとした。

これにより、時季や産地に依らず色や味が規格化された食品の生産が必要となった。そして、トマトやリンゴなどの野菜や果物から缶詰やマーガリンなど加工食品にいたるまで、どこで購入しても、同じ色、同じ味のものが作られ、食べられるようになったのだ。

たとえば米国フロリダ州のオレンジ。同州でサイバイされていた一部の品種は、温暖な気候のため、皮の色がオレンジ色に変化しないまま、身だけが熟することがある。フロリダの生産者らは、緑色の「完熟」オレンジは、たとえ中身が熟していても全国市場では売れないと考え、一九三〇年代初め、合成着色料を用いてオレンジの皮を着色するようになった。

B、消費者が期待する味、または消費者が求めているだろうと生産者が考える味に「合致」する色を作ろうとしたのである。だが果物に着色することは自分たちを欺く行為だと考えた消費者からは抗議が殺到した。

ここで興味深いのは、多くの消費者が、熟したオレンジの「自然な」色はオレンジ色であるべきだと考えていたことである。この場合、実際には、緑色の方が熟したオレンジの「自然な（人工的に手を加えていない）」色であるにもかかわらずだ。

いつでも、どこでも、画一化された食品が市場に出回るようになったことで、多くの人々が共有する「あるべき」色という認識が次第に構築されていくと同時に、そうした認識は、翻って生産者らが予測可能で画一的な色を作るための更なる動機づけとなったといえる。

^(注2) レオ・マルクスが「庭園の中の機械 (machine in the garden)」と呼んだように、農業の工業化・機械化が進んだことで、自然と人工の境界はヨウカイし、「自然」とは自然と人工のハイブリッドとして生み出されるようになったともいえるだろう。そしてオレンジのみならず、さまざまな食品の色、そして味が次第に標準化され、スーパーマーケットや食卓の景色が大きく変化したのである。(中略)

米国で食をめぐる視覚・味覚環境が大きく変化した二〇世紀初頭は、日本でも新たな感覚世界が生まれた時期である。それは、一九世紀末以降の資本主義社会の拡大が米国のそれとは違う意味を持ち、また異なる形で立ち現れたといえるかもしれない。

明治末から昭和初期は、新しいフードスケープ（食を取り巻く空間・環境）が誕生した時代である。コロッケやトンカツなど当時では珍しかった洋風の料理が広まり始めるとともに、新たな食文化も生まれた。一九〇二年（明治三五年）には調剤薬局としてソウギョウした資生堂薬局（現 資生堂）が、アイスクリームやソーダ水の製造・販売を行うソーダファウンテンを店内に開設し、後の「資生堂パーラー」に発展した。白木屋や三越など老舗デパートが食堂を開設したのもこの頃である。

一般庶民には依然として **C** ではあったものの、西洋料理がレストランで提供されたり、雑誌で取り上げられたりすることで、

次第に多くの日本人が西洋的な料理を見たり、食べたりし、「近代化」を感覚的に体験していたともいえるだろう。

また、東京や大阪などの都市部では、近代的都市空間が新たな感覚世界を生み出しもした。たとえば、江戸時代に呉服屋として始まったデパートは、従来の日本建築の店舗から西洋風のビルに建て替えられた。東京では、馬車や人力車に代わり、一八九〇年代に路面電車が開通。また大正以降、それまで上流階級層に限られていた洋装が次第に一般にも広まり始め、和服姿の多かった歩道には、最新の洋装と西洋風の化粧で身を固めた「モガ（モダンガール）」や「モボ（モダンボーイ）」が闊歩する姿も見られるようになる。こうした変化は、ファッションスタイルや建造物など視覚環境の変化のみならず、電車の走行音や海外の香水・化粧品などの新しい感覚的景色が都市の一部となったことを意味していた。

このような新たな感覚体験は、さまざまな摩擦や価値観の衝突の中で生まれたものでもあった。電車の登場は、馬車や人力車事業に携わっていた人々から職を奪うことにもなり、実際、車夫からの反発を受けた。「モガ」や「モボ」らは、社会風紀を乱す存在としてそのイメージが広まりもした。激動する社会で、取り残されてしまった人々、その変化を享受しようとする人々、一方で抗おうとする人々の生が、当時の感覚世界から見えてくる。（中略）

大量生産時代の視覚の画一化にせよ、近代化による感覚体験の西洋化にせよ、これらは一見すると、資本主義システムの拡大により人間が「本来」持っていた豊かな感覚が単調になってしまったり、日本「本来」の感覚が西洋的なものに置き換わってしまったようにも見える。だが、歴史を通して人間の感覚は変化してきたのであり、「本質」や「本来あるべき」ものとは、レンメンと続く歴史の中で作られるものではないだろうか。

このことは、人々が感じ取る感覚、そしてそこから生まれるある種の価値観や認識は、社会的コンテキストの中で読み取る必要があることを意味している。たとえば、洋装や洋風建築のように現代の私たちには当たり前に感じるものや景色は、二〇世紀初頭の日本人の多くには驚きや興奮、はたまた厭気（いやりけ）を招くものだった。このように、政治的・経済的・社会的状況の中で作り出される感覚体験は、その時代・場所特有の意味を持つものである。

歴史とは、単なる過去の「できごと」の寄せ集めではない（また、何が歴史的に「重要な」できごとなのかが決まる過程は政治的である）。英語「ヒストリー」の語源は古代ギリシャ語で「探究」を意味しており、また『三国志呉書』では「歴史」は「人類が経てきた時間」を意味するものとして使われたという。つまり歴史は、社会の変化を読み解く作業である。

個々の事象を点で結んだ歴史理解（年表的歴史観といえるかもしれない）ではなく、流れる時間とそこに生きる生身の人間に目を向け、どのような変化が、なぜ、誰によって起こり、いかなる影響があったのか、それらを丹念に掬い出し探究するのが歴史家の仕事で

ある。多様な感覚体験とそれを取り巻く世界を多角的に捉えようとする感覚の歴史は、過去の人々がいかに生き、感じ、考えていたのかを理解するためのヒントを与えてくれるのではないだろうか。

(ひさのあい
久野愛「感じる歴史」による)

(注) 1 ヴァルター・ベンヤミン……ドイツの文芸批評家、哲学者、思想家(一八九二～一九四〇)。

2 レオ・マルクス……アメリカの歴史家、文学評論家(一九一九～二〇二二)。

問一 傍線部 a 「五感は歴史的産物である」とはどういうことか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。

解答番号は 13。

- 1 五感は、科学技術の発展のような社会の進歩に伴い、時間をかけながら研ぎ澄まされてきたものであるということ。
- 2 五感とは、人間の身体に備わった普遍的な感覚であり、多少の個人差はあれど人類に共通するものであるということ。
- 3 五感とは、時代ごとの社会や環境の影響を受けながら、その体験や意味づけを変化させてきたものであるということ。
- 4 五感とは、技術や経済の方向性を決定する要因であり、長く人類の研究対象となり続けてきたものであるということ。

問二 空欄 A ・ B に入る語句はなにか。次の 1～8 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

い。ただし、同じ選択肢を二回選ぶことはできない。解答番号は 14 ・ 15。

- | | | | |
|-------|-------|------|--------|
| 1 つまり | 2 さらに | 3 さて | 4 あるいは |
| 5 そこで | 6 ゆえに | 7 だが | 8 なぜなら |

問三

傍線部 b 「感覚史」という研究分野」とあるが、筆者の論じる「感覚史」とは、どのような観点を前提としているか。次の 1 ～

4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 16。

- 1 人々の環境や認識は本質的にはあまり変化しないという観点。
- 2 身体は文化によってつくられていくものでもあるという観点。
- 3 歴史学や人類学こそが人間の本質を解き明かすという観点。
- 4 物理的なモノとして身体を見るのは認識が古いという観点。

問四

傍線部 c 「景色」という語」とあるが、筆者が考える「景色」とはどのようなものか。次の 1 ～ 4 のうちから適当でないものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 17。

- 1 視覚だけではなく、ときにほかの感覚器官も働かせて総合的に作り出されるもの。
- 2 写真などの視覚メディアを介した場合でも、その場にいる感覚を想起させるもの。
- 3 日常で用いる場合と仏教用語として用いる場合で、言葉の意味が違ってくるもの。
- 4 その時々における人々の、世界の感じ方や見方を探り当てる手がかりとなるもの。

問五

傍線部 d・e・g・h・i と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 18 ～ 22。

d 「キヨウギ」

- 1 キヨウリヨウな人物だ。
- 2 能楽にスイキヨウする。
- 3 母親のキヨウリに帰る。
- 4 恐怖でゼツキヨウする。

e 「サイ|バイ」

- 1 雑誌にケイサイ|される。
- 2 巨額|のサイ|ムを抱える。
- 3 頑丈|なヨウサイ|を築く。
- 4 ボンサイ|を手入れる。

g 「ヨウ|カイ」

- 1 声にヨクヨウ|をつけて話す。
- 2 詰問|されてドウヨウ|する。
- 3 火口|からヨウガン|が流れる。
- 4 ヨウサン|業が盛んな地域。

h 「ソウ|ギョウ」

- 1 船をソウ|ジュウ|する。
- 2 ドクソウ|的な絵画だ。
- 3 コクソウ|地帯が広がる。
- 4 オフィス|をカイソウ|する。

i 「レン|メン」

- 1 カンメン|を鍋でゆでる。
- 2 一次試験|をメン|ジヨ|される。
- 3 メン|ミツな打ち合わせを行う。
- 4 給料|のガクメン|を確かめる。

問六

傍線部 f 「多くの消費者が、熟したオレンジの「自然な」色はオレンジ色であるべきだと考えていた」とあるが、このような事態を筆者が「興味深い」としているのはなぜか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 23。

- 1 生産者は熟したオレンジの自然な色を緑色と認識し、消費者は自然な色をオレンジ色と判断したことで、「自然な」という言葉の定義が生産者と消費者の間で異なっていることがわかったから。
- 2 消費者が、「身」が熟しているにもかかわらず皮の色だけを基準にしてオレンジの品質を判断するようになったことが、工業化に伴う食品の評価基準の変化を象徴する現象であったと言えるから。
- 3 生産者が市場競争に勝つために消費者の期待に迎合し、果実の本来の色を変えてしまうという手法を取ったという事実は、効率性を重視する社会に隠された倫理的問題を示唆しているから。
- 4 消費者が熟したオレンジのあるべき色として思い描いた色が、実は大量生産によって規格化されたオレンジ色であったという事実から、社会が人々の認識を築いていたことがうかがえるから。

問七

空欄

C

に入る語句はなにか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 24。

- 1 高嶺の花 たかねの花
- 2 井の中の蛙 かわす
- 3 餅は餅屋 もち
- 4 花より団子

問八

傍線部「洋装や洋風建築のように現代の私たちには当たり前前に感じるものや景色は、二〇世紀初頭の日本人の多くには驚きや興奮、はたまた厭気を招くものだった」とあるが、現代と近代でこのような反応の違いが見られるのはなぜだと筆者は考えているか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 25。

- 1 現代の人々は近代化の進展を経て文化的に成熟したため、景色に対して近代の人々のように感情的な反応を示さなくなったから。
- 2 近代は現代に比べて社会の動きが人々の価値観や認識に強く影響し、近代化を象徴する景色に対して人々が敏感に反応したから。
- 3 生活様式や都市空間が大きく変容した近代では、現代とは異なる時代性によってつくられた感覚体験が人々にもたらされたから。
- 4 和装や日本建築が主流であった近代の風景において、西洋的な建築物は明らかに調和を乱す存在で悪目立ちするものだったから。

問九

本文から、「歴史」とはどのようなものであるといえるか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 26。

- 1 過去の事象を年表のように整理し、その順序や日時を正確に記録することで成り立つもの。
- 2 単なる過去のできごとの集積ではなく、連続的な時間の流れの中で社会の変化を示すもの。
- 3 特定の国家や民族にとって重要なできごとを選出し、それらを中心に意味づけを行うもの。
- 4 長い時間の中で人類が経験してきた普遍的なできごとを抽出し、未来予測に役立てるもの。

問一〇 本文の内容として正しいものはどれか。次の1～4のうちから適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 27。

1 ヴァルター・ベンヤミンは、近代化がもたらした急速な工業化や市場拡大の裏で生じた環境問題などの弊害を「ショック」と呼び、人々の利便性ばかりを追求しようとする近代の方向性を批判した。

2 農業の機械化・工業化が進むと食品の色や味が標準化されるようになり、日本でも明治末から昭和初期にかけて洋風料理や外食文化が広まって、「近代化」を感覚的に体験する機会が増えていった。

3 近代的都市空間の出現は、日本の感覚世界が西洋的な感覚世界に塗り替えられ、古来変わらず続いてきた日本本来の感覚が喪失したことを意味しており、さまざまな摩擦や価値観の衝突が起こった。

4 東京や大阪の都市部では、近代的都市空間の形成によって洋装や西洋建築が広まったが、それらは主に上流階級に限られた変化であり、一般の人々の感覚世界に大きな影響を与えることはなかった。

次ページ以降にも問題があります。

問題三

「私（田中律^{りつ}）」は小学生の頃から内気な性格で、自分のことを「臆病な女の子」という意味で「マウス」だと考えている。以下は、「私」が大学生になってからのことが描かれている場面である。次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

大学に入ったら浮かないためにはある程度遊ばなくてはならなくて、そのためには、私が入っても不自然でないようなサークルを探^aす必要がある、それに入ったら最後、知らない人がいる飲み会に出席したり意味不明の旅行に連れ出されたりと恐ろしいことが目白押しなのだろうと思っていたが、それは勝手な先入観だったようで、私は安堵^{あんど}した。当然のことだが真面目に授業を受けている熱心な学生はいっぱいいいて、私がいくら熱心に授業を聞いても、中学校のときのように、「なに、真面目に古文なんかの授業聞いているの、あそこテストに出ないのに」と笑われたりする心配もなかった。大学生達はずっと大人で、自分のしたい勉強をすることを大切にしている、馬鹿な子供っぽい心配ばかりしていた自分が恥ずかしくなった。

仲良くなった友達のほとんどがサークルにも部活にも入っておらず、講義を終えた後の時間を自分のしたい勉強や好きなアルバイトなどにあてていた。

一番に仲良くなった深雪^{みゆき}ちゃんは、きつと、小学校のころ私のような「大人しい女子」だったんだろうなと思わせるお嬢様っぽい子で、少し久美^{くみ}ちゃんと雰囲気似ていた。

「律ちゃん、今日、午後の必修のあと時間ある？」

「ごめんね、今日、バイトなんだ」

ルーズリーフをバインダーにはさみながら答えると、深雪ちゃんがおかしそうに笑った。

「本当、バイト、好きなんだねえ」^b

改めて言われるとなんだか恥ずかしくなり、首を横に振ってみせた。

「めっちゃめっちゃきついよ。立ち仕事だし、忙しいのに人手はいつも足りないし」

「でも、それがやりがいあるんでしょ？」

その通りだったのうまい返事がみつからず、私は誤魔化すように笑った。

春から始めたアルバイトは思いのほか楽しくて、私はいつのまにか休日と午後に講義のない日はびっしりとシフトを入れるようになっていた。ハンカガイにあるファミリーレストランのウェイトレスだった。始めたばかりのときは筋肉痛になってどうなることかと思ったが、やればやるほど、のめりこんで熱心になってきていた。今では、講義より大切かもしれない、とこっそり思うときまである。

ようになっていたのだ。

午後の授業を終え、私は深雪ちゃんと連れ立って駅へと向かっていた。

深雪ちゃんは携帯電話に表示された時計を見ながら、

「今日、いつもより早く終わったね。いつも先生、話長いのに」

と言った。私はうんず頷き返すと、

「それ、かわい可愛いね」

と、深雪ちゃんの携帯電話から下がっていたストラップを指差した。

「これ？ そうなの、友達が、私に似てるねって言ってお土産に買ってきてくれたの」

言われてみると、そのウサギのストラップの優しそうな顔は、深雪ちゃんと少し似ていた。

「うん、確かに、似てるかもしれない」

「そう？ 私、小さいころから、動物にたとえるとウサギだって言われるなあ。律ちゃんは？」

「私は……ネズミかな」

声が小さくなり、かすれてしまった。深雪ちゃんは、「そうなんだ、律ちゃん、小柄だもんね」などと言ってうんず頷いている。私はすぐに話をそらした。

「必修のレポート、進んでる？」

「ああ、あれかあ。全然。資料が集まらなくて」

「私も。学校の図書館だと、全部かりられちゃってるしね」

「そうだねえ。あ、律ちゃん、電車来たんじゃない？」

遠くから踏切の音が聞こえ、私の方面の電車が到着しようとしているようだった。私は深雪ちゃんに急いで手を振り、改札へと走った。

ホームへ降りると、タイミングよく到着した車両に駆け足で乗り込んだ。中途半端な時間だったせいか、珍しく車内はちらほら座席が空いていた。

腰掛けて窓の外の景色を見ると、ゆっくりと電車が動き出した。

(中略)

最寄り駅につくと、撤去されないように隠していた自転車を路地の隙間から取り出した。安物の、藍色のシティサイクルだが、高校の一年生のときからずっと使っているから愛車といえるかもしれない。私はサドルにまたがってペダルをこぎ出した。

暦上は秋とはいえ、外の空気にはまだ夏の感触が残っている。生ぬるい空気が肌を撫でていき、私は額のアセをぬぐった。

バイト先である、家の近くのファミリーレストランにつくと、私は自転車をとめて鍵をかけた。

「おはようございます」

入り口のソウジをしていた、副店長の木村さんという女性に会釈をする。

「お、律、おはよう」

木村さんはさつぱりとした女性で、私は彼女が好きだった。木村さんを見ると早く制服に着替えたくなり、私は「おはようございます」と皆に声をかけながらフロアを抜け、事務所へと早足で向かった。

「律、はっえーよ」

事務所のドアを開くと、たまたま休憩をしていた高島君がコーラを飲んでいたストローから口を離し、こちらへ笑いかけてきた。

「だって、今日から新しいメニューが始まるでしょ。予習しようと思って」

「えらいなあ、律は」

武田さんが髪の毛を結いながら言った。バイト先では、みんな、私のことを「律」と呼び捨てにする。小さいころから「田中さん」、仲良くなっても「律ちゃん」だった私は、それだけで、なんだか自分が社交的な女の子になれた気がして嬉しい。

クリーニング済の制服の中から、自分のサイズを見つけ出すと、それを持って、隅っこのドアを開けて小さな更衣室へ入った。

「あれ、もう着替えるの？」

「うん、制服、好きだもん」

「何言ってるの、こんなダサい制服があ？」

私はカーディガンと中のキャミソールを脱ぎ、スカートのチャックを下して下着姿になった。更衣室の中の小さな鏡をのぞくと、小学校のころの面影の残った、内気そうなくぼんだ目の女がこちらを見ている。私は少し眉をしかめてそれを睨むと、手元に視線を落とし、ハンガーから淡い水色の制服を外した。

ワンピース型の制服に腕を通し、背中のチャックを上げる。ぴったりとした制服は着るだけで背筋が伸びる。肩より少し長い髪の毛

をブラシできつちりと結い上げ、黒いネットに入れる。

私はもう一度鏡をのぞいた。そこには、「田中律」ではなく、「一人のしつかりと身なりを整えた「店員」がいた。

私は満足して、更衣室のドアを開いて外に出た。さっきまでとは違い、事務所にも凜とした空気が流れ始めた気がする。

あれほど人と話すのが苦手な私が、「職場」という空間では、不思議とすらすらと言葉を交わすことができた。大学では苦手な同年代の男の子も、仕事仲間だと思えば、きちんと目を見て、いくらでもしゃべれた。ここが学校と違うのは、「仕事」という大きな役割が据えられているという点だ。ただの田中律ではなく、店員としての田中律になることで、私は驚くくらい、大きな声を出し、活発にうごきまわり、顔色を窺わずに周りコミュニケーションがとれるのだった。「今は仕事中です。私は店員です」という

A は、私

にとつてはお給料よりずっと大切な授かりもので、それを装着すると、臆病な田中律はいなくなる。仕事として働くとき、いくらウエイトレスのスカートをはいていても、私は性別から解放されているような気持ちになれる。女として品定めされるのではなく、店をまわすための「駒」として品定めされるのだ。私はそれが心地よかった。誰よりも使える駒になったかった。

「律はよく声が通るね」

「元気がとりえだからな、律は」

表へ味噌汁の補充に来ていた厨房の杉山さんが、冗談めかして言った。私はぽかんとして杉山さんを見つめた。

「なに、どうしたの。悪かったよ、もちろん元気だけじゃないって、デザート作るのも一番早くて綺麗だしさあ」

私が怒つてと思ったのか、急いでフォローしている杉山さんを見て、私は慌てて口を開いた。

「あ、いえ、びつくりしただけです。あ、私、氷の補充、行ってきます」

冷凍庫を開き、氷を掬ってプラスチックの容器に入れながら、私はぼんやりとさっきのことを思い返していた。冗談とはいえ、私が「元気がとりえ」と言われる日がくるとは。小学校の同級生が、もしこの店に来たら、びつくりするのかもしれない。そういえば、教室では、こんな大きな声を出したことなど一度もなかった。「マリー」になつてしまう前の瀬里奈ほどではないものの、私の声はいつもか細くて、何度もタンニンに注意された。いくらお腹に力をこめても、教室のざわめきにすぐにかき消されてしまうような声しか出なかった。それが、

B

、魔法にかかったみたいになれるようになってしまったのだ。

「律、デザート入ったよ。補充はいいから、あっちよろしく」

「あ、はい！」

木村さんに声をかけられ、思わず大きな声をあげてしまった。苦笑いした木村さんが私の背中を叩く。

「律、元気なのはいいけど、お客さんびつくりするでしょ。ほら、早く」

「はい、行ってきます」

氷の入った容器を木村さんに渡すと、私は慌てて立ち上がった。チョコレートパフェを作りながら、まさか大きすぎる声を怒られる日がくるとは、と私はなんだかおかしくて、少し笑ってしまった。

(村田沙耶香『マウス』による)

(注) 1 久美ちゃん……小学生の頃の「私」の同級生。

2 「マリ」になってしまいう前の瀬里奈……「瀬里奈」は「私」の小学生の頃の同級生。クラスの皆から変わり者のように扱われよく泣いていたが、ある時「私」が『くるみ割り人形』の話を聞かせてやると、その日から瀬里奈は泣かなくなり、『くるみ割り人形』の主人公「マリ」のように華やかな存在としてクラスに打ち解け始めた。

問一 傍線部 a 「大学に入ったら」とあるが、大学入学後の「私」の心境を次のように説明したとき、に入る語句はなにか。

あとの1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 28。

「私」が大学生活に対して抱いていた思いはまったくの であり、「私」は安心するとともに、不必要に身構えていたことを恥ずかしく感じた。

- 1 蛇足
2 矛盾
3 守株
4 杞憂

問二

傍線部 b「本当、バイト、好きなんだねえ」とあるが、この深雪の言葉を「私」はどのように受け止めたか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 29。

- 1 あきれたような深雪の笑い方に、やりがいを感じている仕事のことを馬鹿にされたように感じた。
- 2 午後に深雪と付き合う時間が取れないことについて、遠回しに嫌味を言われているように感じた。
- 3 深雪は何気なく言っただけかもしれないが、自分の仕事への思いを言い当てられたように感じた。
- 4 講義よりも仕事を優先していたので、学業をおろそかにしていることを指摘されたように感じた。

問三

傍線部 c・e・f・g・j と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 30 ～ 34。

c 「ハンカガイ」

- 1 ハントを広げる。
- 2 草木がハンモする。
- 3 セキハンを食べる。
- 4 生徒のモハンとなる。

e 「カリ」

- 1 同じシヤクドで計測する。
- 2 貴族がシヤクイを授かる。
- 3 筆記具をハイシヤクする。
- 4 帰宅後にバンシヤクする。

f 「アセ」

- 1 カンダイな対応に感謝する。
- 2 ハッカン作用がある。
- 3 シンカンセンが走る。
- 4 カンヨウな点を覚える。

g 「ソウジ」

- 1 害虫を薬でイッソウする。
- 2 地方のベッソウに泊まる。
- 3 家族でソウギをとり行う。
- 4 教室がソウゼンとした。

j 「タンニン」

- 1 ダイタンに行動する。
- 2 ヒタンの思いにくれる。
- 3 論理のハタンを指摘する。
- 4 けが人がタン力で運ばれる。

問四

傍線部 d 「私はすぐに話をそらした」とあるが、このときの「私」はどのような様子か。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 35。

- 1 思わず自身の劣等感をさらけ出すようなことを言ってしまったが、相手が自分の言葉の真意に気づいていないようだったので、そのままその場をやり過ごそうとしている。
- 2 思い切って自分の臆病さを打ち明けるような発言を試みたが、相手が的外れな返答をしてきたために拍子抜けしてしまい、話題を変えて気を取り直そうとしている。
- 3 自分は冗談交じりで何気なく発した言葉のつもりだったが、相手が言葉の意味を重く受け止め掘り下げようとしてきたので、話が大きくなるのを避けようとしている。
- 4 いたって自然に自分らしい動物を挙げたつもりだったが、いざ相手に納得されるとみじめな気持ちになって、話の続きがどうでもよくなるほど自暴自棄に陥っている。

問五

傍線部 h 「私は少し眉をしかめてそれを睨む」とあるが、このときの「私」はどのような気持ちか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 36。

- 1 アルバイトで憧れの制服を着られるようになったのを機に、臆病な自分とは決別し、私生活でも積極的な自分に成り変わろうと決意している。
- 2 アルバイト先で社交的になれた気分を味わっていたが、鏡に映る内気そうな自分の姿を客観視し、もう一人の弱い自分に不快感を覚えている。
- 3 アルバイトをしている時は社交的な自分に生まれ変わるが、弱気な自分に戻りそうになっていることに気づいて、気持ちを奮い立たせている。
- 4 アルバイトの制服で頼りなさそうな見た目を誤魔化したはずが、鏡の自分が理想の姿には見えず、思うように変身できなくていら立っている。

問六

傍線部 i 「そこには、「田中律」ではなく、一人のしつかりと身なりを整えた「店員」がいた」とはどういうことか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 37。

- 1 「私」は女性という性別から解放され、他人に品評されない自由な存在になれたということ。
- 2 「私」は学生という平凡な存在から、店員という社会的価値のある存在になれたということ。
- 3 「私」は個人として責任を取る必要のない、企業に守られた社会的存在になれたということ。
- 4 「私」はかつての臆病な自分ではなく、店で手際よく働く機能的な存在になれたということ。

問七

空欄 A に入る語句はなにか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 38。

- 1 仮面
- 2 勲章
- 3 手綱
- 4 足枷かぜ

問八

空欄

B

に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 39。

- 1 大学に入ってからというもの
- 2 大切な友人のこととなれば
- 3 勉強以外のことだとわかると
- 4 仕事だと命じられたとたん

問九

傍線部k「私はなんだかおかしくて、少し笑ってしまった」とあるが、「私」はなぜ「笑ってしまった」のか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 40。

- 1 アルバイト先で声が大きいと注意されたことについて、以前の自分の性格や言動から考えるとその注意がいかに的外れなものかが分かり、滑稽さを覚えたから。
- 2 元気な声を評価された経験がほとんどなかったため、そうしたやり取りを交わすこと自体がどこかそばゆく、慣れない状況に気まずい思いさえあったから。
- 3 アルバイト先で元気な声を褒められるようになった自分が、かつてはか細い声しか出せずに注意されていた過去を思うと、その変化が面白く感じられたから。
- 4 大きな声を出すことで職場の雰囲気になじんでいる自分に気づき、以前の姿との違いから思いがけない成長を実感し、その状況が嬉しく思われたから。